Capt. L. L. Janes と熊本洋学校(2)

古　田　榮　作

前稿では、熊本洋学校の成立と熊本洋学校へのジェーンズ招聘の経緯、そこでの教育指針をヴァーベックの書簡とジェーンズと熊本県との約定、ジェーンズの熊本県廳への建言、および彼の自伝（＝“Kumamoto, An Episodo in Janpan's Break from Feudalism”）によりながら、熊本洋学校での英学教育について考察した。

本稿では、熊本洋学校の教育を、いま一歩進めて考察しようとするものである。

明治五（1872）年九月、第二年度を迎えた熊本洋学校は72名もの実学党子弟の新入生を迎えていた。同年八月の「学制」は文部省規則に従って学校教育を行うことを定め、同年九月二五日付の内報で

洋学校・医学校官員分課御届過日進達致置候処今般更に御詮議之趣有之、外国教師在留の学校と雖、一切廃止の筈、尤外国教師雇入候定約も有之事に付、其間之給料は下げ渡候得共、差向来る十月分より其の県月給等総て給与不相成筈、右者両三日之内御布告も可有之候得共、当県は遠方の儀に付、前以為心得相達候段、文部省牟田口元高より演達有之候此段申達候也[1)]

と、洋学校・医学校の廃止を求め、公立諸学校の「学制」に基づく再編成を要求すると共に、外国人教師に関しては「契約履行」の観点からその俸給を文部省が支払う旨をつたえるものであった。これに続いて文部省は布達三五号で「地方ノ見込ヲ以テ保護ノ道相立、或ハ人民私財ヲ以テ学費相弁、引続教育為致候儀ハ不苦[2)]」とその存続への途はわずかに残された。県当局は「県庁ニ於テ如何様率仕法ヲ付是迄通相運候筈ニ付脇々ヨリモ成丈助決イタシ候様尽力有之度、右ニ付近々竹崎茶堂罷越候条得斗談合候様[3)]」と各戸長に達し、戸長の洋学校・医学校維持のための側面的財政的尽力を要求していた。翌年二月には山田武甫、嘉悦氏房の大木喬任宛調書で

洋学校（中略）諸費は勿論右幹事（＝野々口為志）以下之俸給等去十月以後ハ一切官費ヲ廃シ、管下富豪等ヨリ献金ヲ以テ一切相弁ジ候筈、尤右献金未ダ集金之埒ニ至兼、員数ハ分兼候得共、往々永続之見込ニ御座候。両所（＝医学校・洋学校）生徒貧生迄ニテ御規則之受業料納ムルコト能ハズ候ニ付、是又前条献金ヲ以テ扶助仕候[4)]

と、竹崎の富豪・豪農層への説得により、医学校・洋学校の存続・維持への展望が切り開かれつつありことを強弁しようとしていた。三月一三日には文部省から白川県宛に

其県御雇外国教師条約期限中給料之儀ハ、当省ヨリ可相渡云々、昨壬申第三五号ヲ以テ布令致置候通、仮令ヒ保護ノ道相立、其教師ヲ以テ学校等相開キ候トモ、条約期限相済候後ハ、官費ヲ以テ雇継不相也ハ勿論ニ候得共此段為心得

追テ本文教師民費等ヲ以雇継候儀ニ付其旨可伺出候[5]

との正式回答を受け、一五日付の文部省指令は

洋学校通弁給料ハ無拠次第ニ付、小学普及之為メ、其県委托之金額中ニテ相渡可申[6]

と通訳の給与の公費支出（実質的には国費）を認めることになり、熊本洋学校は管下富豪層の支持と、中央政府の庇護によって公立学校として、学制頒布ついで、諸既私設学校の廃止という、重大な局面を切り抜けることができた。

だが同年五月二八日の参事山田武甫の依頼免官、権令安岡良亮の来任とそれに伴う人事大移動で、実学党首脳＝白川県首脳が白川県庁から姿を消し、熊本洋学校を支持する強力な行政部隊は壊滅しようとしていた。ジェーンズとの雇用期限切れの迫る中で洋学校の維持存続を願う実学党有志から民費雇傭契約存続の相談を受けた旧知事細川護久は、明治七年五月に、白川県に

白川県洋学校雇入ノ教師当九月期限ニテ爾後官費学校廃止ニ相成、生徒退散ノ由ニ候処、右教師雇入ノ発端ハ護久旧藩知事奉職ノ時ニテ、条約ハ三年ノ期限ニ候得共、教師ノ目算ハ遂年生徒等級相進ミ候故、三年ニテハ成業ニ至リ難ク、満四年ヲ以テ、初年生全ク成業ノ規則ニ有之候段、申出候ニ付、満三年ニ至リ候得ハ、猶談判モ可有之ト内場示談モ致シ置候。然ル処御規則モ有之、条約ノ通リ、今年ヲ以テ廃校ニ相成候得ハ、現在百余ノ生徒ハ追々成就ノ学芸忽チ廃棄ニ至リ、是迄教師ノ尽力、生徒ノ勉強全ク水ノ泡ト相成リ、実ニ惜ノ至ニ候。右ハ護久発起ノ訳ニモ有之、方今、華族中ヘハ厚キ勅旨モ被為在候折柄、護久一分ノ義務人民保護ノ責任ヲ尽シ度素志ニ有之候間、右学校ノ経費護久家禄ノ内ヲ以テ、相応ノ資金ヲ給シ、教師ヲ雇継、民費学校ヲ再起シ、生徒ヲ保続シテ、全ク成業ニ至ラシメ度、懇願ノ至ニ候、此段奉願候。可然御届御執計被下度候[7]

との「寄付願」を提出した。洋学校設立の端緒を与えたものとしての責任感と君主としての人民保護の義務感から、資金提出を申し出たのであり、彼の

上ハ以テ開花日新ノ御旨ヲ賛補シ、中ハ以テ県治ノ政化ヲ助ケ、下ハ以テ自主自由ノ民俗ヲ保護シ、従来生徒ヲシテ、其材ニ従ツテ各器ヲ成就セシメ、大ニシテハ廊廟辺豆ノ選ニ充ツルニ足リ、小ニシテハ一司一局ノ器用ニ供スルコト[8]

という、国家、地域社会の教化の一翼を担って、政治的有為の人材輩出の機関＝学校観に支えられたものである。こうして初年度入学生の卒業までは洋学校の存続が実現した。

ジェーンズは明治七（1874）年十月三日の熊本洋学校継続記念式典で講演を行った。この講演で

聞く、前知事公仁恵を垂れ、此の校を接続し、以て汝生徒等学業を接続するを得ると、且つ、聞く、汝等の父母朋友皆共に之を喜ぶと、予も亦た甚だ今日あるを喜ぶ。前知事公の此挙、根本となり、此校の盛に永続するは、予が希望する所なり。予職務を接続し、三年の業、水泡に属せざるを知るは、実に予が大慶なり[9]。

初め、予米国にあり、貴国に招かるゝに及びてや、予之を決するに、二ヶ月の久しきを以てす。何となれば、事大に任重く、米国にての教師の任とは、又大に異り、第一学校を創業するを要すればなり。貴国に入るに及び、其学校の形勢を聞き、或は之を目撃するに、予大に失望するところあり[10]。

本題に入るに先立って学校存続の感激を述べた上で、来日に当たっての重大決意を述べている。創業の困難と日本での先例の様相の伝聞が好ましからざるものであったことを明言している。こうした上で、

然れども、当校を開き、実際に当るに及び、事予が聞見する所と相違し、実に予が望、足れりと云うべし。第一当校の生徒、過半、英の語音に達する、米国にて、同歯の青年生に比すとも、聊か劣ることなし。且つ予数年、米国陸軍校にありて、同校生徒進歩の景況を熟知するに、当校生徒、学に就く以還歳月の長からざるに比すれば、学業に進歩し、智識を開発したる、更に異なるなし。当校生徒、其の進歩速かなる所以のものを原るに、初め業を創るや所謂高きに登るは卑きよりするの理に倣ひ、初歩に反りて基本を固ふせしに由るなるべし[11]。

予想外の教育効果を賞賛し、その成功の要因を基本から確実に学習した結果であると指摘している。（西洋人特有の外交辞令も含まれていよう。）

元来、是れ予が説にして、凡そ生徒の学に就く、一々之に因らずんばあるべからず。予往々他県学校の廃絶するを聞き、甚だ之を憂ふ。思ふに、是れ、本を務めざるに因るなからんか、初めに反り、イロハより生徒を教導するは、人の好まざる所なり。去りながら、予大に力を此に尽し、益其肝要なるを知るなり。米国文運の盛なる、実に之に基けり。而して、彼国の此に至る数十年の久しきを経て、人民漸く本を務むるの肝要なるを知れり[12]。

貴国にても、敢て初めより洪大なるを欲せず、勉て力を根本に入れ、イロハより教導すべし。然らざれば、決して日本に公教（公教は教育普及の意、宗教の事に非ず、以下皆同原註）の道、盛なること能はず、基礎一たび成るに及んでは、盛大になすこと、最も易しとす。乃ち今日の小学を中学とし、中学を大学となす。何の難き事か之れ有らん[13]。

開校以来、予が聊か微力を尽し、且つ生徒の勉励により、漸く初歩の難を過ぎ、今

日に至れり。而して予不肖ながら最も務めし所は、生徒をして各智を磨き徳を積ましむるにあり、且つ鉱山、製造、貿易の諸業を起し、以て聊か国家の益を為さしむるは、是れ予の望む所なり。今度学校延期に付き、生徒之を喜悦するは、予が三年間の教導無益ならず、又た徒に今日まで歳月を費さざりし証なり。而して、三年前に定めたる学則も、実際に行はるるを得たり、此予が望み足れりと云へし。[14)]

と教育での初歩の確実な習得の必要を繰り返し強調した後で、現在の生徒の状況を「漸く初歩の難を過ぎ」た所であり、向後の指針として「生徒をして各智を磨き徳を積ましむる」ことと「鉱山、製造、貿易の諸業を起し、以て聊か国家の益を為さしむる」ことを掲げている。すなわち生徒の個性に応じた知的教育、道徳教育と起業による国家への貢献を求めている。知識の経済活動への活用を念頭において人格の形成を重視した教育を第二段階の課程として位置づけていこうとしていたのである。これに続けて

今予何故に粉骨砕身、以て生徒を教導するや、何故に、予他事を捨てて、一に教育に従事するを望むや、と、諸君或は疑あらん、請ふ之を述べん。

第一には、予生徒進歩の速かなるを見て、大に教ゆる力を得たり。

第二には、歳月逝に従ひ、生徒及び国人を愛する情益深くなればなり。

第三には、当校開校以来、予益教育の国家に大益あるを悟ればなり。[15)]

と三年間の「充実した」教育実践によって、生徒のみならず、実学党を中心とする地元民との愛情溢れる交流があり、それが彼らの生活態度にも反映されようとしているのを実感していたことを示すものであろう。徳富蘆花は評伝『竹崎順子』の中でジェーンズの事を幾たびか取り上げているが、ジェーンズが学校教育以外に熊本で行った事績を次のように評している。やや長きにわたるがみてみたい。

洋学校の教師、北米合衆国人ゼエンズは、南北戦争に北軍の大尉として力戦し、戦後カリフオルニアのある要塞司令官になって居ましたが、泰平の世界に軍人は無用だと謂ふて、メリイランド州に地所を買ひ、農生活を始めやうとして居た處に、日本の熊本から招聘され、英語教師として来たので、もとより唯の武邊一方の軍人ではありません。三十四歳の彼は單に英語で普通教育を肥後選りぬきの秀才子弟に授けたに止まらず、父兄に向つて、色々殖産興業の注意を與へました。彼は熊本の當局者に、養蠶、製絲、織物は早速著手して欲しい三つの組の事業である事を説きました。市外の九品寺にあつた練兵場の演武場をつぶして桑を植ゑ、實學連の長野濬平以下養蠶を始め、順子の父矢嶋忠左衛門鶴子が長い間御惣庄屋として住むだ中山とは川一つ隔てた甲佐に緑川製絲場を設けて兼阪百梅の女きん子、徳富の三女音羽子などが模範工女になつたり、音羽子の姉みつ子の夫河田精一等が率先して刀劍書籍を賣り飛ばして絹織物を始めたりしたのも、ゼエンズの誘導に原づいたのでありました。

明堯舜孔子之道、盡西洋器械之術と云ふ横井小楠の衣鉢をついで、日新堂に聖人之

道を構ずる竹崎茶堂は、ゼエンズの知識を利用するに何の躊躇もありませんでした。彼は一方に大學を講じつゝ、一方にはずんずん北米の文化を取り入れました。明治六七年、神風連が袋刀を提げ電信線の下を扇をかざして潜りあるく最中に、彼は米国種の乳牛を飼育して牛乳をしぼりバタをつくりました。牛種の改良も企てました。蔬菜の種子を米國から取寄せて、玉蜀黍など何十種も試播し、落花生（其頃は落地生と云ふて居ました）なども盛につくりました。農具も白川端の畑に plough（西洋鋤）を使はせたりしました。果樹栽培にも熱心でした。何しろ嘉永年間布田山上の生活をしつゝ藥用人參の栽培に着手したやうな眼早く手早い茶堂です。有利と見れば頓着なく實行しました。北海道に開拓使が大きく行つた事を、竹崎茶堂は小さく熊本市外の本山村でやつたのであります。門人の高木第四郎が永年牛乳屋で通したり、plough を握つた相愛社の田中賢道などが後年北海道の開墾に從事したりしたのも、其名殘であります。バリカンなどいふ洋種の家禽を盛に飼育して、卵を食ひ肉を食ふたものです。順子の母の鶴子が、食物衛生に殊に注意した事は已に書きました。それは專ら節制の方面でしたが、茶堂は積極的に自愛をしました。彼は酒を飲みません。其かはり食ひました。胃弱でしたが、マグネシアを飲みつゝ盛に所謂「養生食」をしました。ゼエンズが英語と殖産興業方面の知識を與へた如く、ゼエンス夫人は料理裁縫等の智識を與へました。實學社中の女達は見習ひ聞き習ふて牛肉のうまい料理などが方々の家庭に出來ました。他では思ひも寄らぬ頃から、竹崎家にはミシンがありました。而してフランネルなども米國から取り寄せて、老人子供も節子がミシンで縫ふたシヤツを着たものです。ゼエンズ夫婦の物質的恩恵には、實學社中何れも多少浴せぬ者なく、社中の洋行歸りの岩男俊貞などは金縁眼鏡をかけて、大江の徳富の宅近くに一向實りもせぬ葡萄園を開いて盛にカナブンブンを養つて居りましたが、就中慾深は竹崎茶堂でした。茶堂はゼエンスから獲能ふ限りを取りました。而してそれをどしどし取捨し、實行して、生活を豐富にして行きました。肥後に於ける所謂文化生活の率先は、何と云ふても竹崎茶堂であります。[16]

「彼は單に英語で普通教育を肥後選りぬきの秀才子弟に授けたに止まらず、父兄に向つて、色々殖産興業の注意を與へました。彼は熊本の當局者に、養蠶、製絲、織物は早速著手して欲しい三つの組の事業である事を説きました。」、「ゼエンズ夫人は料理裁縫等の家庭的知識を與へました。」と「ずんずん北米の文化を取り入れました。」と「殖産興業と文明開化」の導き手としてジェーンズを活用したのであり、殊に熊本藩知事細川護久による藩政改革により、録事として出仕し、ジェーンズと熊本県の契約書に野々口又三郎、兼阪諄次郎とともに署名し、その大半が実現されることになる「改革意見綱要」を建言し、熊本政府の要路にあった竹崎律次郎（＝茶堂）は、「ゼエンスから獲能ふ限りを取りました。而してそれをどしどし取捨し、實行して、生活を豐富にして行きました。

肥後に於ける所謂文化生活の率先は、何と云ふても竹崎茶堂であります。」と評されているのである。「生活の豊富化＝文化生活」の実現を教育の重要側面と捉え、「生活文化の創造」を実践しようと考えていたのではなかろうか。更に彼は

而して、近年各国大に此事を悟り、争て教育を布んとす。実に千古未曾有の改革にして、予亦教師の任にあるは、大悦の至なり。予此改革の大意を下に述べ、以て諸君の一覧に供す。[17]

教育の事たる大なるかな。人之れに由て初めて、人職を尽し、国是れに由て、富強に、政府之に由て安然たり。豈に又た人事に大益ある、斯くの如き者あらんや、然らば、即ち愚聊か俛焉として此の職に従事せしも亦何ぞ怪しむに足らん。教育の大効を見んと欲せば、先づ文運盛なる諸国の実情を探ぐるに如くはなし。

公教の大益を悟り、之れを実際に行ひしは、合衆国を以て始とす。蓋し人民無学なれば、共和政治の国体一日も存すること能はざればなり。初め、米国独立せしに当てや、人民寡く、国極めて、貧なりと雖も、爾來、人民挙て、公教に注意し、益々此道を起せしに因り、此国駸々乎として文化に進み、方今に至りては、人民凡そ四千万、実に堂々たる一大国たり。十年前、奴隷の事起り、南北間四年の戦争に及びしや、元より、北方は文学盛に、南方は之に乏しきを以て、遂に北方勝利を得て、奴隷の大害随て除かる。

フレデリッキ大王の普国に王たるや、夙とに公教の大益あるを識り、初め此国に学校を與せり。中間偶ま那破倫の乱に遇ひ、一時廃絶に属すと雖も、其後再び此の道を起し、方今に至り、公教の道全備せりといふべし。

仏国は之に反し、一世那破倫覇業を開きしより、専ら武備に力を用ひ国民挙て兵たり、三世那破倫伯父の業を繼ぎ、逆政を施し、暴を以て、下を制し、更らに公教の道に注意せず、全国中僅かに、陸軍学校あるを見るのみ。

今や万国挙て文化に進むの時、斯く覇術を以て下民を束縛せしの害ある、普仏戦争の景況を見て瞭然たり。乃ち四年前、一小事に托し、猥りに普と兵端を開きしが、又教育無学に勝ち、数旬を待たず、仏軍大に敗れ、普兵進んで「パリス」王城を囲むに至る。是に於てか、仏国和を請ひ、償ふ所の金貝五億余に至ると、此金五十年間、欧州中学校の費に充るに足れりと云ふ。[18]

と、教育の効用を「人職を尽し、国是れに由て、富強に、政府之に由て安然たり」とし、「人事に大益あり」とするが、ここでは、当時の熊本の聴衆に理解しやすく説く必要からか、教育の有無で戦争の行方を決めた例として、アメリカの南北戦争と普仏戦争を取り上げ、「北方は文学盛に、南方は之に乏しきを以て、遂に北方勝利を得て」とし、「教育無学に勝ち、数旬を持たず、仏軍大に敗れ」としている。さらに論を補完するために「償ふ所の金貝五億余に至ると、此金五十年間、欧州中学校の費に充るに足れりと云ふ」と

敗戦したフランスの賠償金の高額に比しての（中学）教育費の相対的廉額をもち出して説明している。これに続いて次のような要約が挿入されている。

是れより氏は進んで、少数者を教育して、多数者の教育を忽にする時は、其の少数者の教育も用を為す能はざる所以を論じ、東洋諸国が、普通学の布及に着手しつつあるを説き、更に進んで、欧州諸国が、公教普及の実際を陳べ、公教の一国全体の進歩を利し、国力を強ふするは者たるを示し、独り、之に止まらずして、凡て発明乃ち、蒸気、電信、鉄道の大発明より、其の他農工商に関する発明等、皆な悉く教育の結果なるを論じ、遂に左の如く論結し、大に教育の忽諸に附すべからざるを示せり[19]

と、大衆教育を重視し、「生活文化の向上」をその基本理念に据えているのは、先に引用した徳富蘆花の評伝『竹崎順子』が描いたように実践していたのではなかろうか。続いて、

問ふ、国の以て宝とするは、何ぞや、土地の広大豊饒なるを以て、宝とするか、曰く、否。人ありて、耕せずんば、何の用か之あらん。然らば、即ち、政府の領する近海及び海港を以て宝とするか、曰否。人間才智を磨きて、貿易を為し、以て之を用ひずんば、何の宝か之あらん。然らば、即ち、国の鉱山を以て、宝とするか、曰く、固より鉱山は宝なれ共、人間才智を磨きて、之を堀り、以て製せずんば、何の用か之あらん。既に国の宝は、土地草木鉱山海港等に非ざれば、之何にあるか、諸君必ず云ん、人なりと。予謂ふ、然らず、何ぞ、必しも人にあらん、夫れ蛮夷は土地を耕さず、貿易せず、山林に木の実を取り食と為し、禽獣の皮を以て、服とし、唯饑餓の憂を防ぐのみ。然れ共、彼も人なり。方今、欧米諸国に数百万の游民あり国の益を為さざるのみならず、却て之が害を為し、以て国の衰微を醸す。

彼英国の如き、貧院にある者一百万人、乞食罪人等又た一百万人、皆口を糊すること能はざる窮民にして、他人の扶助を仰ぐ者なり。是れ、真に公教の道無きの致す所とす。

又た、数年前、普軍仏国に侵入せしに当てや、「パリス」都城に同様の游民旦夕饑餓に迫りし者、数万人ありしと云ふ。此等元より一文不通の者なれば、普仏合戦中、却て、自国の害を為せしや、最も甚しとす。

彼等悪党を結び、猥りに政府の命に背き、尽く「パリス」府中の有名なる高塔大厦を倒し、之を焚き、人を殺すこと、草を苅るが如く、剰へ、政府を覆し、国の大権を奪ひ、遂に宇内に名高き「パリス」城をして、大半灰燼とならしむ。其暴行想ふべし、是を以て観れば、国の宝は又た何ぞ必しも人にあらんや。[20]

国の以て宝とするところ、以て富強とする所は、人民の徳にあり、智にあり、此二つの者備り、而て後、国寧し、徳なくして富ある時は、却て、国の害となり、智なくして強兵なるときは、之を用るに謬る。是れ万古不易の金言にして、古今の歴史に照々

たり。

嗚呼、日本の人民自国の富強ならんことを欲せば、能く此語を記し、智徳を以て、国の基礎となさば、何ぞ成らざる事之れあらんや。[21)]

と、イギリスを「公教の道無きの致す所」、フランスを「一文不通の者」と評した上で、「国の宝」を「富強」に求め、「人民の智徳」を説く。すなわち、「智徳を以て、国の基礎となさば、何ぞ成らざる事之れあらにや。」と高らかに「教育立国論」を提唱した上で、

人民の多きを恃む勿れ、印度は三億人の人口あれ共、英の配下にあること、茲に百余年の久しきに及へり。

土地の豊饒なるを恃む勿れ、西斑牙は天然、極めて豊饒なる国なれ共、公教の道乏き故、人民至って暗昧にして、方今土留古の外、欧州中、最も貧弱の国とす。

之に反して、瑞西国は、山稜多く、土地豊饒ならず、且つ欧州の中心にありて、海港なく、運送の便極めて悪しと雖も、公教の道能く開け、都下富貴の人民より僻村貧賤の農夫に至るまで、更に無学の人を見ず、是によりて、四隣の大国数ば盛衰興亡の変に遇ふと雖も、此国更に靡くの色なく、人民能く其権利を得て、共和の政府を存し、堂々として、中央に独立する者、茲に四百余年なりと云ふ。欧州政学者は此国の盛大なるを見て、亦公教の欠くべからざるを知れり。[22)]

と、インド・スペイン、スイスを取り上げ、植民地インド、貧弱の国スペインと公教育の整備されていない国の弱さを、スイスに例を取り上げ、立地上好条件に恵まれないものの公教育制度の整備が、共和政治と地方分権を実現しているとした上で、

人となりて、其国を愛するは、当然の事なり、然るに、愛国とは、何を愛するを云ふや、土地草木を愛するを云ふに非ず、山沢江河を愛するを云ふにあらず、所謂、愛国の士は、其国人を愛するを云ふ。嗚呼人の上に立ち、政を為し、以て国を助けんとする者は多く、愚民を憐み、之を教導せんと欲する者世間何ぞそれ少きや。[23)]

と、真の愛国者を「愚民を憐み、之を教導せんと欲する者」に求め、富強な国家の建設、人民の生活文化の向上と高度な社会福祉の実現を兼備する政治の実現しようとする為政者の必要を説く。更に彼は、

今強敵あり、来て日本の海岸を侵さば、衆人挙て之を防ぎ、死を以て許すべし。彼敵豈敢て貴国に横行するを得んや。然るに、今日本内に外寇よりも尚恐るべき敵あり、衆人何ぞ出て防禦せざるや。無学則ち是なり。国家の治乱興亡、実に之に基く、国をして貧弱ならしむるも無学なり。人民をして塗炭の苦に陥らしむるも亦無学なり。鉱山開けず、製作起らざるも、無学の為す所なり。如此き大敵国内に蔓延し、大害を為すに、苟も志ある者、晏然として傍観すべきか、誰か人民を憐むの情を発せざる者あらんや。

敵に対し、国家の為め命を授る者を志士と云ひ、勇士と云ふ。況や此大敵を拒き、

以て人民倒懸の苦を除かば、豈之れを仁者と謂はざるべけんや、嗚呼古今幾万度の戦闘徒に土地を荒し、骨を野に暴すことを為さず、力を尽して此大敵を防がば、方今開化の品位等の上にあらんことを想ふべし。又た、軍に費したる幾億万の大金を以て、愚民の愚を救ふに用ひば、其功の大なるを知るべきなり。哀哉、宇内の人民今漸く無学の害を悟れるを。[24]

と、彼の「無学＝大害論」は国防論にも及び、戦争否定、戦争防止の根基を教育の確立に求めるのであり、結語として以下のような教育の効用を掲げている。

教育は人民の幸福を増し、無学は人民に禍害を与ふ。

教育は国の魂魄にして、無学は国の大病なり、大難なり。

教育は国を強ふし、無学は国を弱くす。

教育は固陋の風習を去り、無学は人の悪情を煽動し、怨を結ぶ。

教育は国の品位を進め、無学は之れが進歩を防ぐ。

教育は働き、無学は怠る。

教育は、土地を耕し、製作を起し、交易を盛にし、無学は此等の諸業をして衰微に赴かしむ。

教育は病院を設け、人民の病を治癒し、無学は牢獄を建て、人民をして、之に入らしむ。

教育は貧院を設け、唖子に談話を教へ、聾に聞くことを教へ、盲目に目を与ふ。無学は市街に此等の窮民を充て、而て益其教を益す。

教育は徳を積み、智を磨き、業を修め、無学は愚人を造り、小人を生ず、無学其子に謂ふ、汝、我が学び得たる外は学ぶこと勿れ、汝慎て、我が為す如く、為し、我業を業とせよ。

教育其子を戒めて、日勉めよ哉、勉めよ哉、汝能く人道を尽し、美名を天下に、挙げよ、我が老後の楽何を以てか之に加へん。

無学は旧来の器械を用ひ、之を改むるの術を知らず。

教育は日に之を新にし、益其精巧を加ふ。無学は進まず、動かず、而て物進まず動かざれば、腐敗し、死亡す。

教育は故を温め新を知り、益々之を窮め之を明にす。無学は流れざる堀水の如し、其水を飲まば毒となり、其臭をかげば病となる。

教育は山中に湧き出る清泉の如く、其水の美なる水晶に似たり。文明に進むの水車を転し、智徳を耕すの田地を湿し、以て人間欠くべからざるの大幸を生す。誰か斯く大幸大益ある教育を拒む者あらんや、誰か之を拒み以て無学の暗夜に居るを願はんや、之を為す者は、国の敵たり、民の仇たり、如此き人は、愛国の士に非ずして子孫と雖も其行跡を聞て之を愧るに至るべし、此に反して、恵を施し、貧者を憐み、専ら人民

の開花を進めんと欲する人は、所謂真の仁者にして、其死去するに当ても衆人挙て之を悲しみ、之を惜まん。

旧知事公の此校を接続せらるゝ、又た此の如し、汝等生徒此鴻恩を奉謝するの道他なし。各徳芸を修め、一身を擲ち、以て邦家開花の進歩を助くるにあるのみ。当校の善悪の如きは、予が云ふ所に非ず、生徒功を奏するや否やを以て知るべし。[25)]

このようにジェーンズは、教育と無学を対置して列挙している。十五組の対置は公教育の成果が全般的に発揮された時の理想化された姿ではあるが、講演会という多数の聴衆を前にしての提起であることを考えれば「雑多な列挙」の側面はあるものの「洋学校存続」を広範に訴える場でのものとしては肯んじるものである。これらの組の対置的表現を便宜的に①社会福祉、②強兵、③殖産興業、④文明開化に分類すれば、**表1**のようになる。

①社会福祉と②強兵を政策としての「富国強兵」と比して考えれば、個人の幸福の増進を基盤にその追求の過程で困難を持った者への社会政策としての医療制度の確立、保障制度の確立を構想し、魂魄を掲げ、公教育に negative な態度を批判し、教育への positive な姿勢を保てる者を「愛国の士」をする所に、「軍国主義」とは異質な「愛国心」を認めることが出来るのではなかろうか。ましてや、アメリカで南北戦争の勇軍の士と名高い退役大尉の発した言葉である。近代兵器、近代戦術への言及を欠くことは注目に値する。③殖産興業に関しては、勤勉と怠惰との対比で、起業、交易の拡大と産業の衰微との対比で、更には旧来の技術の固持と技術革新への態度を強調している。④文明開化

表1　ジェーンズの教育と無学の対比

分　類	教　　育	無　　学	項目
社会福祉	人民の幸福を益す	人民に禍害を与える	1
	設病院・病気の治癒	建牢獄（犯罪続出）・人民入牢	8
	貧院設置、障害者教育	窮民市街充満（＝スラム化）	9
強　　兵	国の魂魄	国の大病、大難	2
	国の強化	国の弱小化	3
	愛国心	亡国奴・売国奴の横行	14
文明開化	固陋の風習の除去	悪情の煽動、結怨	4
	国の品位向上	国の品位低下	5
	積徳・磨智・修業	愚民製造・生活態度の保守	10
	挙美名	（生満）改善意志の欠如	11
	日新精巧	不進	13
	温故知新・窮明	流れない堀水の如きもの	14
	清泉・水晶・大益大幸	汚水・滞水（腐敗）	15
	施恵。憐貧者人民開化		15
殖産興業	勤労	怠惰	6
	殖産興業	諸業の衰微化	7
	器械文明（＝技術革新）	低劣な技術	12

表2 「被仰出書」の教育と無学の対比

分類	教　　育	無　　学	虚学等
	脩身・開智・長才芸 治生・興産・昌業	貧乏・破産・喪家	詞章記誦・空理虚談 学問＝士人以上のこと 小学＝義務教育 実学奨励 「受益者負担」

では、固陋の風習の除去と悪情煽動・怨を結ぶ、国の品位の向上と低下、積徳・修業と愚人・小人、人道を尽し、美名を挙げる（＝出世）とそれに対する消極的態度、温故知新と腐敗、清泉と汚水・滞水の対比が挙げられているが国の品位に関する項目以外はどちらかと言えば個人の生活態度ないしは生活指針を掲げるものと言えよう。

この対比は、教育を個人の努力と見なしその効用を社会的財産と位置づけようとするものであろう。ここでこの対比を「学制」の序文として提示された「学事奨励に関する被仰出書」（＝以下「被仰出書」と略記する）に見てみよう。

「被仰出書」は「学制」を確立するための人民への布令であり、「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん[26]」ために「他事を抛ち自ら奮て必ず学に従事せしむべき様心得べき事[27]」を徹底するために太政官が布令したものである。教育の奨励に当たって「被仰出書」教育の効用を如何に掲げたかは**表2**に示す通りである。「学問は身を立つるの財本ともいふべきものにして人たるもの誰か学ばずして可ならんや[28]」として「国民皆学」の政策を打ち出したこの「被仰出書」は「身を脩め智を開き才芸を長ずるは学にあらざればなし[29]」とし、「夫の道路に迷い飢餓に陥り家を破り身を喪の徒の如きは畢竟不学よりしてかかる過ちを生ずるなり[30]」と学と不学（＝無学）を対比し、「凡人の営むところ学あらさるはなし人能く其才のあるところに応じ勉励して之に従事ししかして後初て生を治め産を興し業を昌にするを得べし[31]」と学問の効用を讃えて「之を身に行ひ事に施す[32]」「身を立つるの財本[33]」となる学＝実学を学ぶために通学を求め、「幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其父兄の越度たるべき事[34]」と教育義務（＝国家への児童・その保護者の小学での教育義務を定めるとともに、「自今以後此等の弊を改め一般の人民他事を抛ち自ら奮て必ず学に従事せしむべき様心得べき事[35]」）と自らの負担で学校を建て、学校を運営することを求めたのであった（＝教育費の「受益者負担の原則」）。「学問は士人以上の事[36]」と考えるのは「沿襲の習弊」として男女の別なく「国民皆学」を樹立しようとしたのであり、「国家の為」と唱え、「詞章記誦の末に趨り空理虚談の途に陥る[37]」「虚学」は「沿襲の習弊」と退けるのである。この両者を比較すれば、ジェーンズのそれは国家・社会全般に亙効用を説くものであるが、「被仰出書」のそれは個人の幸福に限定されたものであり、小学という民設の「国家機関」での学習を義務づけ、それに関わる一

表3 『学問のすすめ』の対比等

分類	教　育	無　学	虚学等	編
	賢人・貴人・富人	愚人・下人・貧人		1
			人間不通日用に近き実学の奨励	1
			分限を知ること	1
	字の学習	恥を知らず		1
	物事の理を知ること	貧窮に陥る		1
		他人を怨む		1
		強訴一揆		1
		暴政暴君暴吏		2
	学問の要＝活用			12
	視察・推究・読書			12
	談話			12
	読書・演説			12
	向上心			12
	学校の名誉			12
			私学の存在	4

切の負担を人民に押し付けようとするものであり、国家の繁栄の姿すら提示されていない。ここでもう一つ同時期に発表された福沢諭吉の『学問のすゝめ』（初編出版1872年2月、十七編出版1874年11月、ジェーンズの演説の時点で十一編まで出版）の学と不学の対比を概観すれば、**表3**のようになろう。『学問のすゝめ』で扱われた問題は多岐に亙るが、ここでは学の奨励と学校のあり方、学習の進め方に限定して考えることにする。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり。[38]」との名言で始まる『学問のすゝめ』では学と不学の対比は「賢人と愚人との別は學ぶと學ばさるとに由で出來るものなり。[39]」「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。唯學問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無學なる者は貧ひととなり下人となるなり。[40]」とした上で、「學問とは、唯むづかしき字を知り、唯解し難き古文を讀み、和歌を樂み、詩を作るなど、世上に實のなき文學を云ふにあらず。これ等の文學も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古來世間の儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず。古來漢學者に世帯持の上手なる者も少く、和歌をよくして商賣に功者なる町人も稀なり。これがため心ある町人百姓は、其子の學問に出精するを見て、やがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり。無理からぬことなり。畢竟其學問の實に遠くして日用の間に合はぬ證據なり。されば今斯る實なき學問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通に近き實學なり。[41]」と実学を奨励し、さらに「學問をするには分限を知る事肝要なり。人の天然生れ附は、繋がれず縛られず、一人前の男は男、一人前の女は女にて、自由自在なる者なれども、唯自由自在とのみ唱へて分限を知らざれば我儘放蕩に陥ること多し。即ち其分限とは、天の道理に基き人の情に從ひ、他人の妨を為さずして我一身の自由を達することなり。[42]」と分限の重要性を強調し、「かりそめにも政府に對して不平を抱くこ

とあらば、これを包みかくして暗に上を怨むることなく、其路を求め、其筋に由り、靜にこれを訴て遠慮なく議論すべし。天理人情にさへ叶ふ事ならば、一命をも抛て爭ふべきなり。是即と一國人民たる者の分限と申すものなり。[43]」と人民の抵抗権を主張してもおり、また「身に才徳を備んとするには物事の理を知らざるべからず。物事の理を知らんとするには字を學ばざるべからず。是即學問の急務なる譯なり。[44]」と教育の手始めの識字へと導こうとしたのであり、「智惠なきの極は恥を知らざるに至り、己が無智を以て貧究に陥り飢寒に迫るときは、己が身を罪せずして妄に傍の富める人を怨み、甚しきは徒黨を結び強訴一揆などとて亂防に及ぶことあり。[45]」とし政府との関係では「愚民の上には苛き政府あり、良民の上には良き政府あるの理なり。[46]」「一國の暴政は必ずしも暴君暴吏の所為のみに非ず、その實は人民の無智を以て自から招く禍なり[47]」と不学の悪影響と断言している。

また

方今我國の形勢を察し、其外国に及ばざるものを擧れば、曰擧術、曰商賣、曰法律、是なり。世の文明は專ら此三者に關し、三者擧らざれば國の獨立を得ざること識者を俟たずして明なり。然るに今我國に於ても其體を成したるものなし。

政府一新の時より、在官の人物力を盡さゞるに非ず、其才力亦拙劣なるに非ずと雖ども、事を行ふに當り如何ともす可らざるの原因ありて意の如くならざるもの多し。其原因とは人民の無智文盲即是なり。政府既に其原因の在る所を知り、頻りに學術を勸め法律を議し商法を立るの道を示す等、或は人民に説諭し或は自から先例を示し百方其術を盡すと雖ども、今日に至るまで未だ實効の擧るを見ず。政府は依然たる專制の政府、人民は依然たる無氣無力の愚民のみ。或は僅に進歩せしことあるも、これがため勞する所の力と費す所の金とに比すれば、其奏功見るに足るもの少なきは何ぞや。蓋し一國の文明は獨り政府の力を以て進む可きものに非ざるなり[48]

とした上で

我輩先ず私立の地位を占め、或は學術を講じ、或は商賣に從事し、或は法律を議し、或は書を著し、或は新聞紙を出版する等、凡そ國民たるの分限に越えへざる事は忌諱を憚らずしてこれを行ひ、固く法を守て正しく事を處し、或は政令信ならずして曲を被ることあらば、我地位を屈せずしてこれを論じ、恰も政府の頂門に一針を加へ、舊弊を除て民權を恢復せんこと方今至急の要務なる可し。[49]

と政府から独立した機関（＝私立機関）での教育・事業・マスコミ等の樹立を自らの責任で進めることを宣言している。独立の気力を強調した諭吉が、既に設立している慶應義塾の存続を意図したものであれ、言論の自由・労働の自由を熱弁していることを合わせて考えれば「被仰出書」とは異質の、またお雇外国人のジェーンズには言明しえない点である。彼は「學問の要は活用に在るのみ。活用なき學問は無學に等し。[50]」として、

學問の本趣意は讀書のみに非ずして精神の働に在り。此働を活用して實地に施すには様々の工夫なかる可らず。「ヲブセルウェーション」とは事物を視察することなり。「リーゾニング」とは事物の道理を推究して自分の説を付ることなり。此二箇條にては固より未だ學問の方便を盡したりと云う可らず。尚この外に書を讀まざる可らず、書を著さゞる可らず、人と談話せざる可らず、人に向て言を述べざる可らず、此諸件の術を用ひ盡して始て學問を勉強する人と云ふ可し。即ち視察、推究、讀書は以て智見を集め、談話は以て智見を交易し、讀書演説は以て智見を散ずるの術なり。[51]

と学識の向上のために不可欠な手法を示し、「人の見識を高尚ににして其品行を提起するの法如何す可きや。其要訣は事物の有様を比較して上流に向ひ、自から満足することなきの一事に在り。[52]」とあくなき向上心が見識のみならず品行をも高めるとし、「學校の名譽は學科の高尚なると、其教法の巧なると、其人物の品行高くして議論の賤しからざるとに由るのみ。[53]」と学校論をも提示している。

「學問の要は活用に在るのみ[54]」とし、「譬へば、いろは四十七文字を習ひ、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱等を心得、尚又進で箇條は甚多し[55]」とほぼ万人に必要不可欠な知識技能をまず挙げて、日用に必要な事柄を円滑に進めることより説き、「學校の名譽は學科の高尚となると、其教法の巧なると、其人物の品行高くし議論の賤しからざるとに由るのみ[56]」とする諭吉の態度とジェーンズの地域社会にとけ込み、彼の知識・技術を導入しようとする精神とに相通ずるものがあると共に、諭吉が学校論の中に専門的知識・技術のみならず、教育法・教師・経営者の品行、そのインテリゲンティアとしての社会的貢献を位置づけていることにも、ジェーンズを迎えた地域社会の先進層の彼への人格的信頼とも似通うものがあるといえよう。

では熊本洋学校ではどのような授業が展開されたのであろうか。卒業証書等からそれを見ていこう。第一回生に出された卒業証書は、ペン書き英文と対訳毛筆の洋罫紙二つ折りで、英文は次のようであった。

To all Persons Concerned

This is to certify that Mr.…… of Kumamoto Sirakawa Ken Japan entered Kumamoto English School at the beginning of Academic Year September 1st 1871, that he has been promt and constant in attendance most obmimenable in department deligent and succesful in application to all the Studies of the course throughout the entire time of four years, that he has creditably passed every annual and semiannual examinations. And that he is entitled to this Certificate of proficiency with various branches of Study embraced in the Course of Kumamoto English School. Namely, I, Elemantary English Language-Embracing Reading, Writing, Grammar, Composition, Declaration and Rhetoric

2. Intellectual and Written Arithmetics 3. Geography 4. General History 5. Algebra 6. Geometory and Trigonometry and Elementary Practical Surveying 7. Natural philosophy 8. Chemistry 9. Astronomy 10. Geology 11. Physiology.

L. L. Janes

Geven at Kumamoto Japan

July 26 1875[57]

対訳は縦書きで、白川県洋学校としての学校印章の朱印が押されている。内容は次のようであった。

卒業生徒エ免許証状

此証状ハ左ノ条目ヲ表スヘキ為メ也

……（氏名）

右ハ千八百七十一年（明治四年）九月第一日熊本洋学校創業ノ日ヨリ新ニ英書ノ業ヲ始メタリ○品行最正シク勇奮堅固ニシテ学問ニ注意シ全ク四年間ノ課程ヲ修ルニ平生勉励且ツ成功ノ状ヲ顕シタリ○正シク年々大小試験ヲ経テ此学校ノ定則タル左ノ各科ニ於テ進歩ノ効トシテ此免許証状ヲ授与スルモノ也

第一　語学　読方　習字　文典　作文　英語　文学　第二　胸算　算術　第三　地理書　第四　万国歴史　第五　代数学　第六　幾何学　測量術　第七　窮理書　第八　化学書　第九　星学書　第十　地質学　第十一　人体書

千八百七十五年七月二十六日

於日本熊本与之　　エル・エル・ヂエーンズ

右教師授与スル所ノ免状訳之調印者也

明治八乙亥年七月二十六日　　白川県洋学校[58]印

すなわち、初級英語では、読み、書き、文法、作文、会話、修辞をおこない、会話は雄弁術、演説を取り上げていた。奇しくも諭吉が知識の深化のための一手法として挙げている演説が、英語で実践されていることは、ジェーンズが田舎町熊本でも「国際人」を育成しようと努力していた証しであり、その成果については前稿でも考察したところである。算術は暗算と筆算であり、そのほか地理、世界各国史、代数、幾何と三角法、ならびに初等・実用測量術、更に物理、化学、天文、地質学、生理学の各学科であった。この学科編成・教育課程を考えれば、熊本洋学校は初等教育とかなり高度な中等教育の双方を担当していたと考えられる。杉井六郎しによる考察によれば、熊本洋学校で使用され書籍（教科書等）は次のようである。

①英語

A　Second Book of Lessons for the use of schools.　Printed and pubulished by deirection of the Dublin : Alexander Thom, printer and publisher, 87 and 88,

Abbfy-Street. Longmanns, Green, & Co., And Groombridge & sons, London 1866

B Third Book of Lessons for the use of schools.

C Fourth Book of Lessons.

D Mcguffey's new First Eclectic Reader, for young learners.
By W. M. H. Mcguffey. LL. D. Cincinnati : Wilson, Hinkel & Co. Philadelphia ; Claxton Remsen & Haffelfinger. New York : Clare & Maynard

E Second Eclectic Reader.

F Third Eclectic Reader.

G Fifth Eclectic Reader.

H The Standard First Reader, for Biginners ;
containining the Alphabet, and primary reading in pronouncing, spelling and reading by Epes Sargent. Boston, 1869

I Independent Elementary Speller : Part-1
A Critical Work on Pronounciation : Embracing A strictly graded classification of the primitive and the more important derivative words of the English Language, for oral spelling ; Exercise for writing from dictation ; prefixes, affixes, etc., By J. Madison Watson, Author of the National Readers, Spellers, and Primer : (下略) A. S. Barnes & Company, New York and Chicago. 1872

J Independent Elementary Speller : Part-2

K The Juvenile Definer, (National Series)
A Collection and Classification of Familiar Words and Names Correctly spelled, accented and defined.
By William W. Smith, (Principal of Grammar School No. 1 New York Author of the Speller and Definer's Manual.) A. S. Barnes and Company, New York and Chicago, 1872

L Mcguffey's New Juvenile Speaker :
Containing more than two hundred exercises. Original and Sellected. Reading and Speaking. (Electrotype Edition)
Wilson Hinkle & Co. (Cincinnati New York)

M The Principles of English Grammar.
Comparising the substance of all the most approved English Grammars extant, and nearly arranged ; with Copious Exercises in Parsing and Syntax.

By William Lennie (Late Teacher of English, Edinburgh, Author of the child's Ladder.)

(Forty ninth Edition) (Edinburgh)[59]

このうち、「程課書」(ママ) の貼紙のあるものA・B・C・Fの四書籍であり、「第……番全……冊之内第……番」の墨書のあるものはA・B・I・J・K・Mの六書籍である。「程課書」は教科書として使用されたものであろうし、「第……番全……冊之内第……番」の墨書のあるものは、少なくとも年間何回か実施された試験の範囲ないしは教育上の到達目標と考えられる。但しI・Jの両書は初級レベルのもので余り使用された形跡が認められないと報告されており、生徒の理解度の方が優れていたことを示すものである。

② 算術

A Intellectual Arithmetic, by Inducation and Analysis. part-1

By Joseph Ray, M.D. (Late Proffesor of Mathematics in Woodware College) (One thousandth Edition Edition-Improved) Cincinati.

B Intellectual Arithmetic, by Induction and Analysis. part-2

C Practical Arithmetic. part-1

D Practical Arithmetic. part-2[60]

A・Bは表紙に「小算書」の墨書があり、またAは「小算書七番」の墨書があり、C・D両書には「大算書」の貼紙が付けられている。四書籍とも「書き込み」が多くあるが、熊本洋学校廃校後、「廃絶ノ校(=洋学校)ヲ興シ、広ク後生ノ開明ヲ謀リ」、「語学ヲ講明シ以テ広ク知識ヲ世界ニ取ル」ことを目的に設立された「広取堂(=広取学校)」生徒の署名があるのでどれほど洋学校で使用されたかは判明でない。

③ 地理

A Guyot's Geographical Series. part-1

Introduction to the study of Geography. (New York Charles Scribner and Company) 1869, 1872

B Guyot's Geographical Series. part-2

C Mitchell's New School geography. (fourth Book of the Series)

A System of Modern geography, Physical, Political, and Descriptive; accompanied by new atlas of forty-four Copperplate Maps, and illustrated by two hundred engravines. By S. Augustus Mitchell, (Author of a Series of Geographical Works.) (Philadelphia: Published by E. H. Butlur & Co.)

D Guy's School Geography, on a new and easy plan; comparising not only a complete description, but mean Topographical information, in a well digested order; exhifiting three distinct parts, and yet forming one con-

nected whole. Expressly adapted to every age and capacity, and to every class of learner borh in Ladies' and Gentlemen's schools. To which is now added a chapter on Phisical geography.

By Joseph Guy, London; 1866[61)]

A・B両書は別紙に「中地理書」の貼紙があり、書き込みも多く通読されたもようである。またCは『近世万国地誌』といわれるもので、明治七 (1774) 年文部省刊行の『万国地誌略』の一部に撮訳として利用されている。

④ 万国歴史

A A History of the World, from the Earliest Records to the Present Time. part-1

By Phillip Smith, B. A., (One of the principal contributions to the Dictionaries of Greek and Roman Antiquities, Biography, and Geography. Vol III. Ancient History. From the triumvirate of Tiberius Gracchus to the Fall of the Roman Empire.) (Illustrated by Map and Plans,) New York; D. Appelton & Co. 549 & 551 Brodway. 1872.

B A History of the World, from the Earliest Records to the Present Time. part-2

C The History of the World: 4 Vols. Vol-4

From the Earliest period of the Year of Our Lord 1783, with paticular reference to the affairs of Europe and her colonies. Tranlated from the German of the Baron John Von Mueller. Compared throughout with the original revised corrected, and illustrated by a notice of the life and writings of the author, by Alexander H. Everett. New York, 1885

D Charles Knight's Popular History of England 8 Vols

"The harvest gathered in the fields of Past is to be brought home for the use of the Present" -Dr. Arnold, Lecture on Modern History. London: Bradbury Evans, & Co.

E A Manual of General History

Being an Outline History of the World the Creation to the Present Time. (Fully Illustrated with Maps) (For the use of Colleges, High-Schools, Academies, etc)

By John J. Anderson, A. M., New York; Clark & Maynard, Publishers) 1873

F A School History of England, illustrated with maps

By John J. Anderson, A. M., 1873

G History of the World, Earliest Records to the Present Time.[62]

A・Bは表紙に「スミッス氏　上古歴史　第三」の貼紙がある。Fはあちこちに注記があり、Fは教科書ないしは重要な参考書として使用されたと思われる。Dは「ナイト氏　英語歴史　全八冊」と註記されているが、第二分冊は欠けている。

⑤ 代数学

A New Elementary Algebra : Embracing the First Principalesof the Sciences. part-1
By Charles Davies, LL. D., (Proffesor of Higher Mathmatics, Columbia College) (A. S. Barnes & Company, New York and Chicago.) 1872

B New Elementary Algebra : Embracing the First Principales of the Sciences. part-2

C University Algebra : Embracing a logical Development of the Science with Numerous graded Examples. part-1
By Charles Davies, LL. D., 1872

D University Algebra : Embracing a logical Development of the Science with Numerous graded Examples. part-2[63]

A・Bは「點竄書」の貼紙がなされている。點竄は algebra を和算の筆算指揮代数的に対訳したものであり、A・B・Cの三書は書き込みも多く、計算の跡もあり相当使用されたものである。Cには「點竄書　六番」、「大学校點竄書」の貼紙がなされている。

⑥ 幾何学・測量術

A 読解不能（内容は幾何学、三角法、表）

この書は、表紙の破損が甚だしく、粗雑な補修がなされており、貼紙も「化学書　十二」と誤記されている。

⑦ 窮理書

A Chamber's Educational Course. Vol-1
Edited by W. and R. Chambers. Natural Philosophy (In 2Vols.), London and Edinburgh.

B Chamber's Educational Course. Vol-2

C First Lesson in Philosophy : or, The Science of Familiar things : in which the principles of Natural and Experimental philosophy are systematically Developed from the Properties and Uses of Familiar Things.
By Thomas Tate F. R. S. A. (American Edition), Revised and Improved by C. S. Cartil, (Principal of Harvard School, Charlstown.) Boston : Hickling, Swan and Brown.

D　The little Philosopher, or the Science of Familiar Things:
By Thomas Tate F. R. S. A. New Edition 1865[64)]

A・Bは「知氏　窮理書　全二冊」の貼紙があり、扉には「第九十四番」の墨書があり、Cの扉には「第十九番」の、Dの扉には「第二十二番」の墨書があり、これらが教科書的に利用されたものであろう。

⑧　化学書

A　Fourteen Weeks in Chemistry.
By Dorman Steele, (Principal of Elmira Free Academy, and Author of "Fourteen Weeks in Descriptive Astoronomy", "Fourteen Weeks in Natural Philosophy", and "Fourteen Weeks in Geology." (A. S. Barnes & Company, New York and Chicago. 1872

B　Principles of Chemistry: Recent Discoveries in the Science, and the Outline of its Application to Agriculture and Arts.
(Designed for the use of Colleges. and schools. By John A. Porter,) (Proffesor of organic chemistry in Yale College) (A. S. Barnes & Company, New York and Chicago.) 1871[65)]

Bは"西洋器械の術"を取り上げており、内表紙にはジェーンズの名前がかきこまれ、使用の跡が窺えるので、ジェーンズ自ら「殖産興業」の指導のために活用したのかも知れない。

⑨　星学書

A　Fourteen Weeks in Descriptive Astoronomy.
By J. Dorman Steele, (A. S. Barnes & New York and Chicago.) 1873[66)]

この書の内表紙標題のところに、"The heavens declare the glory of God; and the firmament showeth his handy-work"という賛美歌の一節が印刷されている。この一節が後に「熊本バンド」結成の引金になるのである。表紙の欠損・計算の跡等から相当使用されたものである。

⑩　地質学

特定の書籍はない。

⑦窮理書に関連する記述があるので、それによって教育を進めたものであろう。

⑪　人体書

A　A Treatise on Phisiology and Hygine for Educational Institutions and General Readers.
(Fully Illustrated) By Joseph C. Hutchison. M. D., New York: Clark & Maynard, Publishers, 1873.

B The Physiology of Man; Designed to represent the Existing state of Physiological Science, as applied to the functions of the Human Body. By Austin Flint, New York: D. Appleton and Company, 1873[67]

Aは生理・衛生学の教科書と見られ、Bは表紙に「フリント氏　生物学書　全四本」と墨書されている。内分泌、排泄、栄養、心臓、運動、言語に関わる生理学書である。

⑫ その他の書籍

A A Manual of Naval Tactics: Together with a brief critical analysis of the principal Modern Naval Battles. By James H. Ward, New York: 1865

B Fortification and Artillery. By Hector Straith. (Fifth edition, London; Published by W. Allen and Company)

C Handleiding Tot de Kennis der Zee-Artilierie door H. Van Goens. Roetterdam, H. Nijgh. 1863

D The Practical Metal-Worker's Assistant by Olver Byrne. Philadelphia; Henry Carey Baird. 1867

E Twenty-Seventh Annual Report of the Board of Education of the city and country of New York, for the year ending December 31, 1868 (New York, 1869)

F Commentaries on American Law. Vol-1 By James Kent. (Eleventh Edition, Boston; Little, Brown, and Company. 1867

G Commentaries on American Law. 3Vols, Vol-1, Vol-3

H Vocabulaire du la language Francaise extrait de la sixieme et derniere Edition Du Dictionnaire de L'Académie par M. CH. Nodier. Paris, 1864.[68]

Aは「海軍書　全一本」、Bは「築城書　図附」、Dは「一八六七年　鉱術書」・「勘局官本」・「熊本洋学校」、Hは「三番　仏良西字書」の墨書があり、Eには「合衆国学校雑記」の貼紙が施されている。またCは「御軍艦操練所」「白川県図書印」「熊本洋学校」の朱印が捺されているので、洋学校の前身の所蔵文献が混入されたものであろうと推測されている。

これらの諸文献の中の一部は殆ど利用された形跡のないものや全く読まれていないもの（袋綴で、紙鋏を入れた跡のないことから）ものもあるが、ジェーンズが教科書のみならず、「自学自習」のために可能な限り書籍を整えようと努めていたことを示している。

熊本洋学校の名を高からしめるものは、一には「熊本バンド」の結成であり、他は男

女共学の嚆矢である。廬花は『竹崎順子』で「母の心は色々に七人の女に傳はりました。順子に父が忘られぬ如く、母の記憶を別して大切にもつ久子は、己が境遇と閲歴から婦人の位置について大方ならぬ不満を抱き、婦人の位置を向上さす必要と、それには女子教育の必要を早くから感じて居りました。自身は四女三子（一男は夭）の母で、病身で、眼が悪くて、勉強する暇もありません。それでも男ばかりの熊本洋學校に季女の初子をつせ子の女みや子と共に就學させたのも、久子の熱心でありました。」[69]と記述しているように、熊本洋学校で二名の女子生徒が男子生徒と肩を並べて勉学に励んだのである。廬花の紹介した初子は徳富猪一郎（＝蘇峰）の妹であり、みや子は横井小楠の娘であり、横井時雄の妹である。その実現の経緯をジェーンズの言から見てみよう。

二人の生徒（徳富猪一郎・横井時雄）が決意をこめてわたしを待ち受けていた。

彼らは異口同音で次のような質問をした。

「われわれには妹がいる。彼らもわれわれと同様に学習に非常な熱意を持っている。われわれが帰宅したときには、彼らはわれわれの所にきてわれわれから教わろうとする。われわれはあなたが教えられた方法で彼らに僅かの知識を教えている。少なくとも英語だけでも学習できたなら、彼らは幸せであろう。しかしわれわれは普段は学校にいてかれらに十分指導してやることができない。彼らをわれわれと同様に学習できるようにならないだろうか。彼らのために何かできることはないでしょうか？」

「あなたがたは何が言いたいのですか？」

「彼らを新入生としてこの学校に迎えることはできないでしょうか？」

「あなたがたの両親はそう望んでいますか？」

「母親（＝横井小楠は既に暗殺されていたので）は自ら学習することと同様、妹の学習にも熱心です。」

「わたしの両親も完全に同意しています。しかしまだ古い習慣から、女子教育や男女共学の導入は大きな変革であるので、あなたに危険が及ぶことを心配してはいますが。」

「県庁の意見は如何なのか？」

「責任者の山田武甫はあなたがそうするつもりなら異議は唱えないと約束してくれました。野々口又三郎氏もわれわれの母から説得されています。野々口の唯一の懸念はそのニュースが広まる時に、政府や県当局の開明政策に不満の者共から反対運動が起こることです。」

「始業の日に彼らを学校に連れて来なさい。彼らに新しいクラスに席を与えましょう。彼らを他の新入生と同様に教えましょう。力の限り彼らを守りましょう。彼らがあなたがたの妹であることから、他の生徒も彼らに礼儀正しく接するか彼らを受け入れることができなくて学校を去って行くかのどちらかです。事の端著は日本の何処か

で切られなくてはならないので、いまここでそれをやってみましょう。」

「既に肥後の人々はわれわれと同じく少女たちの教育について論議し始めている。肥後の人々は少女たちの将来の配偶者が不面目にならないように、教育される事を口にしている。少女たちに少年たちと同一の教育を与えることはあなたに新しい負担を課すことになる。肥後の根深い野蛮な思想風潮があなたにより多くの負担をかけることになりますが。」

「彼らをこの学校に連れてきなさい。彼女たちに自ら結論を出させましょう。」

こうして二名の少女が熊本洋学校に登校し、新入生のクラスの一つの長椅子に腰を下ろした。少年たちは彼女たちが汚れたものであるかのようにできるだけ彼女たちから離れて座ろうとし、またそのため席を移動する者があったり、あわてて席を移動しようとして長椅子からころげ落ちてしまった者もいたが、表立っては反対の行動を取いはしなかった。男女共学に対する情緒的な嫌悪は学校のいたるところにみちていた。その日のうちにこの嫌悪感を除去するための講義が行われた。講義は彼らの武士道精神に訴えるものであり、「弱きを助ける」配慮をするよう説いた上で、将来日本の妻となり母となる彼らを無知のままにしておくよう望むなら、彼らから奪い取ることの出来ないこと向上心・自負心以外でしか彼らとの間に共有の精神を持てないようにしてしまうだろう。あなたがたの精神的な優越を彼らに示すことであなたがたの威厳が保たれるなら、真面目で正当な方法でそうしなさい。彼らの正当な向上心を蹂躙するなら、あなたがたの弱点、恐怖心、偏見、更にはあなたがた自身すら彼らの憎しみや軽蔑の対象となってしまうでしょう。品のある人は、他人の希望や権利を踏みにじってまで向上しようとはしないものです。わたしはこの二人の少女に学習する権利を認めたいと思います。あなたがたがそれを自分の権利の侵害だと考えるのなら、他の学校へ移って下さい。そうすれば、彼らもこの学校に留まれるし、この学校の本来の目的も達成されるでしょう。彼らはわたしの教え子です。彼らをわたしの娘のように尊敬の念をもって接して下さい。

少年たちのチューターであった海老名禅正は、偏見は自然なものであるから、その存在には一定の理由がなければならない、と口を添えた。それに対して、偏見の父である、無知は自然のもので、学校で教えられる啓発は無知に対する治療にもなるが、人工的なものなのだ、というジェーンズの応答があった後で、「女は男より劣っていると感じていた。彼らが男の仕事ができないので、ここに来たんだろうから、女の担当すべき仕事を無視したり、軽視したりするだろうから、嫌悪感を持っていたんだ。」と少年たちの一団から声が上がった。ジェーンズは「彼らが男の仕事とされていることが出来ないとか、この時代に彼らには何も出来ないんだということがどうして解るのか？　婦人の劣等性は未だ証明されていない。彼らには、十分な機会が保障されてこなかったからでないのか？　男性に強制されて憶病で、利己的で消費的にされてしまったのではないのか？」

と反論したが、少年たちの一団は、婦人の能力をのばす実験をする場所は日本にはないし、ましてや熊本にはないと再反論を試みた。ジェーンズはとうとう次のように反論した。「男性の憎むべき、身勝手な売春制度にあなたがたは憤りを感じませんか？　婦人は進んでこのように不道徳な制度を創設するほど母性の神聖を汚したことがあっただろうか？　婦人の劣等生は未だ証明されていません。反対に、婦人に対してはさまざまなことについての十分に機会が与えられなかったことから、改良、進歩、啓蒙および幸福の実際の力の半分以上が配慮され強制されて、男性の野蛮な誇り、恐怖、利己性および愚行によって否定されていることを示しているのではないか？」と良妻賢母の育成には教育が必要であり、人類の半分（＝男性）に対する教育だけではその成果は限定的となり、一方では啓蒙しながら他方では偏見を維持することになると主張した。少年たちはしぶしぶ女子教育を認めて、「日本には男女共学の実験をする場所はないし、ましてや熊本にもない。欧米で男女共学の制度が確立するまで待ったらどうか？」と彼らの洋学校への受け入れを拒否する。ジェーンズは次のように反論する。「今日本という国も、あなたがた自身も一切の旧弊を除去しようとしている。あなたがたは日本人として、肥後のサムライの息子として、社会の害悪の完全な除去に与しないのか。放縦と贅沢がローマを破滅に追いやり、高慢と堕落と無知が中国を無力にしてしまった。婦人の劣等生を確信し彼らを厳しく制約することは一種の奴隷状態を維持していることに他ならない。彼らを無知のままにしておきなさい、そうすればかれらは（論理的に）意味のよく通らないことばを話しとばかげた行動をし続けるだろう。子どもを賢く育てたいと願うあなたがたの期待に背いて十分に子どもの世話も出来なくなるだろう。彼らを純粋に動物的な機能の行使だけに（＝ヒトという種の♀に）制限しなさい、そうすればお歯黒の彼らは嫉妬の炎であなたがたを悩ませるでしょう。」と。ついに彼らは「先生、あなたの主張される女子教育・男女共学が必要であるということは認めましょう。しかし、彼らが学ぶべき最善のものをすべて教えるためには、少女のための学校を建てることも一案ではないのですか？　創立間もないこの学校に彼らを押し込んで、学校を危機に陥れるのは何故ですか？　ましてやこの学校は上級生は下級生のチューターになることにいているのではないですか？　わたしは彼らを教えるということは迷惑に思います。そうすることが賢明な方法なのでしょうか？」と海老名が少年たちを代表するかのように言った。

この海老名の質問に対するジェーンズの回答は「あなたが女子教育に反対し、男女共学に反対するなら、彼らのチューターをしなくても結構です。あなたが女子教育・男女共学の原理を認容するなら、あなたが迷惑と感じることが根強い偏見の一形態であると思います。学校の男女共学という革新はわたしやあなたがたが招いたものではない。それは自然と必要性が招いたものである。程度は違うが種類が同一であれば、啓蒙は伝わりやすいものである。彼らを暗い家の中に閉じ込めなさい。そうすれば、あなたがたが

外に出て日に焼けて逞しくなっている間に、彼らは痩せ衰え、青白く弱々しくなっていくでしょう。逆に彼らにあなたがたと同様に日光を浴びる機会を十分に与えなさい、そうすれば次の世代は日光の活力をみなぎらせた力を発揮するでしょう。熊本の人々が現在持っている偏見をぬぐい取らない限り、熊本の地には女学校は設立されないでしょう。というのは、偏見は啓蒙への反対の方向に向くものだから。アメリカの奴隷州では、奴隷への教育に対して犯罪的ともいえる攻撃が加えられたものです。奴隷状態と啓蒙とは相容れない仲なのである。無知は、社会状態がどうであれ、身体的・精神的な奴隷状態への調停可能な唯一の条件である。偏見から生まれた精神的な奴隷状態と道徳的性質を普遍的な教育と啓蒙で、あなたがたが擁護し、あなたがたの原理となっているものから放棄しなさい。そうすれば、さまざまな偏見が消滅していく中で、男女共学に対する偏見も消滅していくでしょう。この学校の歴史から教訓を引き出して欲しい。わたしが外国人であるために、わたしの命は狙われた。今、わたしが熊本で死んだなら、わたしの死は何の価値があるのだろうか？　女子教育に対する覚醒がなされるだろうか？　もしこの学校の生徒の半数が少女になるならば、女子教育の覚醒がなされるだろうが。先ほどあなたは女学校をという提案をした。カトリックの諸国や貴族制度の残る英国とは違って米国では、偏見は意味を失い、原理が意味を持っている。抑圧と専制ではなく、自由が社会の要項となっているこの国では、地上で最善で、最も純粋で、最も開明された家庭の類似がすべての点で男女共学に好意的である。

偏見が重きをなす社会では教育面での男女の分離にいまだ賛意を表している。男女の双生児であったとしても別々の教育を受けることになっている。アメリカでは学校を家庭の継続と位置づけ始めている。男だけのもしくは女だけの家庭が十全なものとは言えないように、少年だけの学校、少女だけの学校では教育は十全になしえないという結論に近づいている。どんな家庭も生活を通して一つの有機体として子どもの養育と特権、責任の免除、義務を分担し合わないでは十全なものとは言えないように、いかなる国家も、そのすべての国民が同様に啓蒙され、有害な偏見から免れるまでは、十分に強くて、安全で、繁栄しているものとは言えない。」というものであった。だが海老名の口からは「わたしは女の子のチューターに落ちぶれようとは思ってもいなかった」という言葉が発せられた。ジェーンズはさらに「チューターになるならないの決定権はあなたにある。……海老名さん、婦人を蔑む男は、母を持ち、姉妹を持ち、ましてや妻を持つには値しない。そのような男は婦人によって作られた食事を一口も食べず、女が縫った衣服をまとわず、女の微笑と女が暖め純粋の愛情からきれいに掃除した家を保有しないことが快適になるだろう。そうした男は売春宿で女奴隷と交わるか、洞窟で生涯にわたって一人で過ごすことがふさわしいだろう。……権力については言わぬまでも、自然、科学、啓蒙、文明は、あなたがたの国民を偏見から解放するものであり、いまそれらが生み出さ

れつつある。あなた自身を含む少年たちすべてを早晩、賢明に歴史的な婦人の解放にふさわしい行動を取るようにして欲しい。あなたは、進歩への道を採用するのですか、忌避するのですか？」海老名はとうとう「あなたの期待に沿うようやってみましょう。」と答えざるを得なくなった。[70]

特別講演とそれに続く質疑応答で海老名を含む少年たちの説得が成功した。ジェーンズの男女共学論は日本の女性が抑圧的な人格形成（＝molding）と女らしさ（＝womanhood）の型にはまった教育の受容の中で、女性は無知のままに置かれ、憶病で、利己的で消費的にされてしまった。少女たちに学習する機会を提供しなさい。婦人の劣等性は証明されてはいない。機会を提供すれば彼らは必ず成果を挙げるというものであり、もう一つの強調点は教育は進歩への第一歩であるとし、国全体の進歩は国民全体が達成すべきものであり、婦人は国民の半数を占めているという事実に基づくものであり、第三点は家庭は両性によって構成するものであり、家庭生活が充実するためには婦人が無知から解放されねばならないというものであった。彼の文明に対する把握が南北戦争への従軍に示されるように自由・平等の実現への熱意に裏付けられたものであった。[71] 端的に米国を平等の国、自由の国、原理が偏見を克服している国と美化する中で、確立された制度とは言い難い「男女共学」を熊本の地で実現することに成功したのである。

熊本洋学校に入学した二人の少女は廃校までの二年間学習を継続した。男子生徒と机を並べて学習し、学習成績においても男子生徒にひけをとらなかったとジェーンズは回顧している。またこの二人の存在は精神的で・道徳的な気配を学校にみなぎらした。女性に対する尊敬が生まれ、ヒューマニスチックな雰囲気が形成された。また共学を通して二人の女性らしさは損なわれることなく、むしろ洗練されたものになっていったとしているのである。二人の少女のその後はどうなったであろうか。ジェーンズは次のように回顧している。年少の徳富初子は枢密院議員と結婚し、京都で模範的な妻・母として生活し、夫とともに社交界に華をそえたという。年長の横井宮子はチューターである海老名禅正と結婚し、牧師の妻として日本各地で少女の教育に貢献した。ジェーンズの言では、生涯にわたって組織、道徳的訓練、知的好意の激励に従事した大きな成果を修めたと言う。

因習的な熊本の地で「革命的」な男女共学が心あたたまる兄妹愛の中にうまれ、外国人教師の粘り強い説得と先進的な実践、更には地域社会の反感を夫人の実際生活での知識・技能の伝授によって好感に代え、同級生・同窓生の偏見を克服する中で実現したことである。

奇しくも、男女共学に猛反発した海老名がその一人を妻に迎えたことが女性の地位向上につながるものであり、またこの二人の洋学校での受け入れを見届けた竹崎順子が熊本女学会を支え、学校として確立させたことにつながったものといえよう。

註

1）熊本県立図書館所蔵藩庁文書 『記録』 24/10 明治五年九月二五日東京出張所より白川県庶務課宛通報（杉井六郎 「熊本洋学校」〈同志社編『熊本バンド研究』所収〉より孫引）
2）明治五年一〇月一六日 文部省布達三五号の趣旨は「旧藩県以来引続き外国教師雇入医学語学中学の類相開き今日迄生徒教育致居候者不少、此等の学校は旧藩県適宜を以取設候儀に付、一方にして数員の教師雇入或は一県にして巨万の金を費やし其の不平不同申迄も無之、然るに今般教育の法方（まま）を確定し生徒の成業をして務て遠大に期せらるべき御趣意により学制御発布相成候に付ては、教育上に於て万事万般一範に帰し、学校の規模教科の順序等は不及申、随て諸入費支給の道に於ても成丈全国に均一平分し、彼れに厚く、此に薄きの類無之様不致候ては、不相成儀に候処、右従前の諸学校其儘差置候ては、偏重の弊難止、教育広普の御趣意不相貫旁不得止の次第に付、前書学校の儀一旦悉く可相廃候」というにあった。
3）熊本県立図書館所蔵藩庁文書 『記録』 24/10 明治五年一一月権参事林秀謙通牒（杉井六郎 前掲論文より孫引）
4）宇野東風著 『我観熊本教育の変遷』 五五～五六頁
5）宇野東風著 前掲書 五五頁
6）山崎正薫著 『肥後医育史』 三四三頁
7）池田朔風著 『熊本洋学校』（杉井六郎 前掲論文より孫引）
8）池田朔風著 前掲書（杉井六郎 前掲論文より孫引）
9）『九州文学』 明治二六年一月刊行号付録（杉井六郎 前掲論文より孫引）
10）同上
11）同上
12）同上
13）同上
14）同上
15）同上
16）徳富蘆花著 『竹崎順子』 一四二～四頁（蘆花全集第十五巻所収）
17）『九州文学』 明治二六年一月刊行号付録（杉井六郎 前掲論文より孫引）
18）同上
19）同上
20）同上
21）同上
22）同上
23）同上
24）同上
25）同上
26）太政官布告第二百十四号
27）同上
28）同上
29）同上
30）同上
31）同上
32）同上
33）同上

34) 同上
35) 同上
36) 同上
37) 同上
38) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一一頁（岩波文庫版による）
39) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一一頁
40) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一二頁
41) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一二～一三頁
42) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一三～一四頁
43) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一六頁
44) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一七頁
45) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一七頁
46) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一八頁
47) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 二編二八頁
48) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 四編四一～四二頁
49) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 四編四六頁
50) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 十二編一一九頁
51) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 十二編一二〇頁
52) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 十二編一二二～一二三頁
53) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 十二編一二四頁
54) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 十二編一一九頁
55) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 初編一三頁
56) 福沢諭吉著 『学問のすすめ』 十二編一二四頁
57) 杉井六郎 前掲論文 一三四～一三五頁
58) 杉井六郎 前掲論文 一三五頁
59) 杉井六郎 前掲論文 一三七～一四〇頁
60) 杉井六郎 前掲論文 一四〇頁
61) 杉井六郎 前掲論文 一四一頁
62) 杉井六郎 前掲論文 一四一～一四二頁
63) 杉井六郎 前掲論文 一四三～一四四頁
64) 杉井六郎 前掲論文 一四四～一四五頁
65) 杉井六郎 前掲論文 一四五頁
66) 杉井六郎 前掲論文 一四六頁
67) 杉井六郎 前掲論文 一四六～一四七頁
68) 杉井六郎 前掲論文 一四七～一四八頁
69) 徳富蘆花著 前掲書 二一三頁
70) Capt. L. L. Janes "Kumamoto—an Episode in Japan's Break from Feudalism—" pp. 121～127
71) Capt. L. L. Janes op cit p. 115